

渥美さんが感激した授業

渥美卓也さんは、経済学部経済学科に所属する2年生だ。インタビューのはじめにお互いの出身地が愛知県で同じだということがわかり、少し盛り上がった。繋がろうと思えば世界中の人と繋がれる時代に、地元で会ったこともないのに同じ出身地というだけで盛り上がる出身地の話題は、なんだか不思議だと感じた。ここまでは余談だが、そんな渥美さんに、まずは感激した授業を尋ねた。

渥美さんは、京都大学で受けた経済学系の授業に感激したと答えた。同志社大学の先輩に声をかけてもらい、大学1年生の夏休みに受けに行ったという。具体的には、省エネルギーラベルがついた家電の値段の決め方に関して、求めるための関数を定め、実際に数式で求めてみるという内容だった。その授業は主に京都大学の2年生が参加する1回完結型の勉強会だったようだが、渥美さんは他大学で受ける雰囲気を楽しみに先輩についていったそうだ。実際に受けてみて、期待していた雰囲気そのものに新鮮さを感じ、感激したのだという。まず渥美さんは男性の研究者が多い分野であるにも関わらず、女性の教授が難しい数式について、生徒を引き込むように話している姿に惹かれた。また、生徒はみんな真面目に授業に参加し、「他の〇〇関数では求められないのか」等、教授に鋭い質問を問いかけているところを見て、「賢い学生がいるんだなあ、、、」と感じたそうだ。生徒の意見を聞いていると、将来にははっきりとした展望を持っており、「かつこいい」とも感じた。

そう答えてくれた渥美さんに、次はどうして経済学に興味を持ったのか尋ねてみた。勝手な想像で失礼極まりないのだが、経済学部というと将来潰しが効くから入学した人が多いというイメージがあり、それとは対照的に、他大学にまで専門の授業を受けに行く渥美さんに、なぜ本学の経済学部で学びたいと思ったのか、ぜひ聞いてみたいと思ったからだ。すると、テレビを見ていて経済に興味を持ったことがきっかけだと教えてくれた。社会が抱える経済に関する問題を解決したいと思うようになり、そのためには学問として深く学ぶ必要があると考え、経済学部に進学することを決めたそうだ。高校時代には理系だったこともあり、論理的な考え方が好きで、また数学が活かせるという点でも、経済学部が良かったという。まだ2年生で研究を行う段階ではないが、今後は統計学や計量経済学の研究をしていきたいと考えているそうだ。私は経済学に詳しくないため、さらにその研究がどんな問題解決につながるのか尋ねたところ、「データとして数字を示すことは、信頼性を高め、その数字に基づいた意思決定はとても大きな価値を生む。だからこそ、統計データの不正表示が大きな問題になっている。それを防ぐために、専門的な知識をもって、データを本当に正しいものかどうか判断する力をつけなければならず、専門的に学んだり研究したりすることは、この力をつけることに役立つ」のだと教えてくれた。また、このデータ分析の技術は、問題を解決するためのツールとして、かなり幅広い分野で活用することができるそうだ。たしかに、データとして出ている値は誰から見ても同じであるし、かなり重要なエビデンスになること、それが間違っていた日には大きな判断ミスが起

きることは、統計学をよく知らない私でも簡単に想像ができる。最近よくビッグデータという言葉を目にするが、それに限らず、今後もっと得られるデータ数は増え、大きな力を握っていくと考えられるので、統計学はとても重要な学問だということがわかった。

今回、渥美さんにインタビューをしてみて、自分の今まで受けてきた授業を振り返った時、他大学で授業を受けたことがないと気が付いた。新たな刺激を求めて、いつもとは違った環境で授業を受けてみるのも面白いのかもしれない。

(文責 上田真実)

上田さんが感激した授業 ～音楽少女と社会福祉～

社会学部社会福祉学科の上田真実(まなみ)さんは、大学一回生での必修科目の「社会福祉入門」という授業に感激した。そこで同志社大学に関係ある人で社会福祉に携わってきた人たちの歴史を聴き、同志社は社会福祉と一緒に発展し、日本の社会福祉を作りあげてきたということを知り、非常に感動を覚えたそうだ。

彼女が「社会福祉」という領域に進もうと思ったのは、「音楽療法士」がきっかけだそうだ。中学高校の授業で、一年間自分の調べたいことをひたすら研究するという授業があった。中学1年生の上田さんは、幼少期からピアノを習っていたことから、音楽業界の道に興味があった。そこで調べを進めると、「音楽療法士」という職業に出会う。さらに現場で働く人にインタビューする機会があり、実際に話を聞くと、音楽療法士は病院や施設で働いていることを知り、そこで初めて「社会福祉」という現場に出会い興味を持ち、以降は社会福祉について調べるが多かったそうだ。彼女は「音楽療法士」になりたいわけではないが、そこから社会福祉に興味を持った。

彼女は中学高校から社会福祉に触れ、そこで専門家の方々や現場で活躍している方々に話を聞いていると、基本的な制度は日本でも整っているが、発展的なものになると海外の方が進んでいるという。日本では理解されない、受け入れられていない分野があり、そこに投資されないから広まらないそうだ。例えば、音楽療法であれば、医療とは別の治療法で効果があるという論文は存在しており、医療の一部として置き換えれば、お金の節約になる可能性もあるにもかかわらず、それについて触れている人はかなり限られている上、その価値がなかなか認められず、国からも補助金が出ないという。児童福祉の分野であれば、里親制度は里子となる子どもはもちろん、里親になる大人がいないと成立しない制度である。里親はその制度にはそもそも関係のない人が立候補でなるものなので、それ自体の制度が世の中に広まってないと里親になってくれる人が少ないので、なかなか制度が広まらないのが現状である。社会福祉が一番進んでいるオーストラリアでは、日本と比べて9倍もの福祉施設があるそうだ。そういった分野を現場側から伝えていくのは限界があるそうだ。彼女はそれを外側から広めるアプローチが出来るように、専門的な知識を勉強しているという。

彼女が在籍している社会福祉学科は、社会福祉に関連しているという点では狭いが、その

中で学ぶ範囲はかなり広く、病院や施設などの利用者に対する関わり方や受け入れ方を学ぶこともあれば、福祉の現場で働く人たちは、何か道具を使うことはなく、「自分自身」が道具であり、自分が何かしていかなければいけないために、「自分を知る」といった興味深い講義があったり、社会福祉にまつわる制度・政策・法律を学んだりするなど、様々な分野から社会福祉にアプローチをかけていると話していた。

彼女は現在でも定期的にピアノを楽しんでいる。自分でピアノを弾くのはとても楽しいが、あくまで個人競技であり団体競技ではなく、大勢では楽しむことはできないと嘆いていた。私は、社会福祉でも同じようなことが言えると思う。個人で福祉を進めていくのではなく、施設に入っている人たち、同業者や政策を取り扱う人たち全てが安心出来る世の中作りが重要であると思う。そして彼女は、日本や海外の社会福祉制度のあり方について吟味し、それらをどのように広めていくかを考えている。今後、日本での社会福祉制度が認められ、福祉を与える側と受ける側がより満足出来るようなハーモニーを奏でることを上田さんは強く望んでいる。

(文責 渥美卓也)

自分の生活を変えた授業～鄭婷婷さんが感激した授業

1. どんな授業なのか

今回取り上げる授業は塩田祥子先生の「ソーシャルワーク演習 1-3」である。この授業は鄭さんが二年生の春学期に受けた授業であり、一年生秋学期の「ソーシャルワーク論Ⅰ」の続きである。概要としては、社会福祉専門職に求められる3つの事柄を知ることである。その三つの事柄とは、「価値観（自己覚知、自分について知る）」「受容、共感（傾聴の姿勢）」「コミュニケーション技法（正しい姿勢）」である。あくまでも気づきが大事であり、それをもとにして援助することが求められる。したがって相手の意見を論破することや、一般的な意見を押し付けるような行為はやってはいけないことになる。とにかく相手の話を聞き、自分と相手は違う人間であるという多様性を受容することが重要である。善悪は決められないもので、それぞれ違っていいという立場に立つ。また、相手の話を聞くうえで、相手の年齢・職業等といった社会的役割や背景を取り払って接するという、自分の思い込みを防ぐことも求められる。そうすることによって、その人の悩みを解決することができる。

2. なぜ感激したのか

鄭さんがこの授業に感激した理由としては、自分の生活に変化があったそうだ。授業を受ける前はコミュニケーションが苦手で人からのお願いなどに対応できない、または自分の思いをうまく伝えられない時があったが、この授業を受けたことで、よりスムーズに対応できるようになったと話していた。相手が話したいことを最後まで聞いてから質問する、自分から心を開くというコミュニケーションの技法を学ぶことによって人と接する際の「正しい姿勢」というものを理解することもできたとも話していた。今後社会福祉を勉強していく

中で、この姿勢を大事にしていきたいと目を輝かせながら語っていた。また、この考え方は現代社会にも応用できると例を挙げながら教えてくれた。現在は多くの国が民主主義体制をとっているが、多数派が少数派を排除するような事態が時々見られる。しかし「受容・共感」の立場から見ると、多数派が絶対的に正義であるのかという見方もできる。また引きこもりの問題もあるが、これも「みんな」も苦しいんだから出たおいで、といった呼びかけもしてはいけない、と自分も引きこもりの時期があったという鄭さんは力強く言っていた。なぜなら、価値観はみんなそれぞれ異なり、無理やり一つに決めてはいけないという考え方がソーシャルワークにはあるからだ。この多様性を受容するという点では LGBT の方々と接するときにも応用できる。

3. 最後に

鄭さんは「何が優しさなのか」と問いかけてきた。鄭さんの話を1時間ほど聞いていた私には、どう答えればいいのかわからなかった。「価値観」の観点からみると、「優しさ」にも様々な形があるということになる。自分にとってはこれが「優しさ」だと思っけていても、相手にとっては余計なお世話などにとらえられてしまい、人間関係がぎくしゃくしてしまうかもしれないからだ。コミュニケーション方法に確固たる答えはないし、相手の背景にばかりとらわれていて上手くいかないということも十分にあり得る。また、この授業で「自己覚知」という概念も知り、自分の今までの人生を見直す機会があったことで、自分のこともよく知ることができたと嬉しそうに語っていた。相手のことを知るためには、自分のことも知る必要があり、「自分」に関しても「気づき」が重要と話していた。鄭さんは、私の話も最後まできちんと目を合わせながら聞いてくださったし、共感もしてくださった。このように鄭さんは今後も社会福祉を勉強していくうえで、真摯に相手と向き合い、試行錯誤しながらもその相手にとっての最適なコミュニケーション方法を構築していくのであろう。

(文責 沼崎友里)

沼崎友里さんが感激した授業 ～じっくり価値観の変遷をめぐる～

今回は文学部文化史学科の沼崎友里さんにインタビューした。沼崎友里さんは三年生の春学期に受けた「演習 AI」の授業で感激した。まず、「演習 AI」はどういう授業なのかを紹介して、彼女が感激した理由を述べていく。

「演習 AI」は文学部文化史学科の必修科目(ゼミ)である。ゼミの先生によって、授業の進み方と内容もそれぞれ違う。沼崎友里さんは所属している北康弘先生のゼミの授業の進め方と内容に感激した。

他のゼミはまだ卒業論文について何もしていないが、北康弘先生のゼミはすでに卒業テーマにすぐ入って、それに対する準備をし始めた。普通のゼミは先ずは基本的なことを教えるが、北康弘先生のゼミは日本古代史という広い範囲で、学生たちのやりたいテーマ集めて、その基準と知識を教える。このゼミ学生は四月中に完成しないといけない大きな課題が一つある。具体的に言うと、自分はいくらどの時代を研究したいか、そしてこの時代の何を研究するかを決めて、そのテーマを他の学生の前で発表することである。沼崎友里さんはこの課題を完遂することにやりがいを感じた。さらに、早い段階で自分のやりたいことをじっくり取り組めることができることに感激した。

それから、学生たちは自分と似たテーマの学生と一つのグループになって、そのテーマの基準になる論文を読み進めていく、そして自分と違うテーマの論文を読むことが授業のメインになった。沼崎友里さんの研究テーマは日本古代史(神話～平安)であるが、奈良時代の研究をする学生の話だけを聞くだけで面白かったという。他の学生が取り組んでいる内容に刺激を受けられることに対する感激した。

沼崎友里さんにとって一番大事なのが、今の日本古代史で自分の研究したい分野に関してはどういう考え方がメジャーかを知ることである。しかし、文献を読む前に、歴史学の中で、京都大学の考え方や東京大学の考え方が少し違うときがあること(例えば、平安時代は古代か中世かに関して、東京大学は古代だと主張するが、京都大学は中世だと主張する)を知らないといけない。このような大事なことを彼女に教えてくれたのも北康弘先生だったという。また、北康弘先生は彼女のテーマにあわせて読むべき論文を教え、話をさらに膨らませたので、彼女は幅広い知識を得られた。

沼崎友里さんは価値観の変遷を調べることに大変興味がある。価値観の変遷とは、ある時代にとっては当たり前だったが、他の時代にはあり得なかったことは、社会に認められる/否定されるまでの過程そのものである。「自分がこう見るのが当たり前だと思っていたことは、二百年前には当たり前ではなかったかもしれない。例えば、女性の社会進出は今の時代は当たり前のことだったが、江戸時代と明治時代はあり得なかった。そこで、女性の社会進出はどのように起ったのかを調べていく。新しい知識を得ることが非常にやりがいを感じる。文学部文化史学科を選んだのもこの理由だった。」と彼女が言った。

沼崎友里さんにとって、価値観の変遷の内容は今までの授業でも習ったことも多かったが、実際に自分のテーマでどのように価値観の変遷を取り入れるかというのを習ったのは北康弘先生のゼミが初めてだったという。だからこそ「演習 AI」の授業に対して特に感激した。

私は沼崎友里さんの話を聞いて、「演習 AI」(北康弘先生のゼミ)の授業のすすめ方と内容に対して、彼女は心の中から感激したことが私に伝わった。他のゼミの学生に比べて、価値観の変遷を調べることに大変興味がある沼崎友里さんは、早い段階で自分のやりたいことをじっくり取り組めることができた。また、自分と似たテーマの学生と一つのグループになることによって、他の学生が

取り組んでいる内容に刺激を受けられた。さらに、北康弘先生の指導のおかげで、彼女は幅広い知識を得られた。沼崎友里さんの「じっくり価値観の変遷をめぐるたい」という夢がこの授業で実現できて、今の彼女にとってこれ以上に感激する授業がないと思う。(文責 鄭婷婷)

ディスカッションと古着～大村さんの感激した授業～

文学部哲学科の大村希望(おおむら・のぞむ)さんの感激した授業は、哲学科1回生の学生が春・秋学期を通して必修で受ける「人文演習」という授業である。この授業はディスカッションがメインの授業であり、「LGBT」や「悪とは何か」など、倫理から哲学までテーマは多岐に渡る。提示された何冊かの課題図書の中から、学生の多数決で取り扱う本を決め、何章ずつかを学生が順番に担当して要約したレジュメを作って議論する。「この授業はできればあらゆる人に受けて欲しい。」と大村さんは話す。

大村さんが哲学科に入ったきっかけは、大学受験に向けて勉強していた時、倫理と「運命の出会い」を果たしたことであった。「これはおもしろいな」と直感した。大村さんはそれまで志望していた史学の分野から、哲学へと道を変えた。

「人文演習」の担当の先生は、大村さんにとってかなり魅力的だった。大学に入ったばかりの学生にとって、ディスカッションは慣れないもので、簡単にできることではない。先生はそんな学生から意見を聞き、まとめ、他の学生にさらに意見を聞くという風にして議論を繋げていったそうだ。「先生は潤滑油のような役割を果たしていました。学生のまとまっていない意見でも、その学生の言わんとしている事を理解し、みんなに提示するんです。Aさんはこういうことを言っているけど、Bさんはどう思う?といった具合に。」

この授業を受けたことで、大村さんは「受容する」ことの大切さを学んだそうだ。それまで大村さんはディスカッションに対する認識として、自分の意見の正当性をもたせること、論理的に正しい発言をすることが大事な部分だと理解していた。しかし、この授業を受けたことで、自分の意見を発信するだけでなく、人の話を正しく理解する受容の部分も大事であると気がついた。担当の先生が学生の話の正確に理解し、それを正確に発信してつなげていくという授業の様子に一年間触れ、人の話を正しく受容しないとディスカッションが成立しないと感じた。大村さんはここから、ディスカッション以外にも、本などから書かれている内容を正確に読み取ることも必要であると考え、その姿勢が根本的に大事であるという考えに至った。この「人文演習」の授業は、大村さんに受容の大切さを気づかせる授業であった。

この「受容する」という態度は、大村さんの中で生かされている。大村さんは古着屋でアルバイトをしているが、お客様の求めているものを把握することに役立っているという。「お客さんに過干渉しないようにしている。ガーッとくる定員さんって面倒くさいですよ。一人で見たい人がいる一方で、何かを探して困っている人もいる。そういう人に話しかけて、会話の中で欲しいものをサッと聞き出します。お客様の求めているものを理解する

ということは受容するという点で共通している。」大村さんはお店のスタッフというよりはお客様のお手伝いというスタンスで接している。また、現在受講しているものに、哲学書を読んでディスカッションをするという授業がある。議論をしていく過程で、他の人は論旨を理解できていないと思う場面がしばしばあるそうだ。大村さんは内容や論旨の正しい理解を大事にして授業をうけているという。

最後に大村さんにメッセージをもらった。「この授業はできればあらゆる人に受けて欲しい。大学生になると、それまでと違ってアルバイトなどで社会に出る機会が増える。そうすると、自ずと目上の方としゃべることも多くなる。対人コミュニケーションが大事な中で、相手の話をしっかり聞くということをこの授業で学んで欲しい。人と話すことを今一度考えて欲しい。」この授業を受ければ、大村さんのように対人コミュニケーションのコツを得られるだろう。(文責 蒔野五聖)

蒔野さんの感激した授業

2000年のシドニーオリンピックを前年に控えた1999年12月に生まれた蒔野五聖(いさと)さんは、きょうだい皆が画数で名前が決められており、その慣習と翌年のオリンピックの両方を合わせて考えて五聖と名付けられたそうだ。また蒔野さんは高校の世界史の先生が好きで世界史が好きになったため、文学部文化史学科を受験し入学した。サークルは落語研究会に所属しており、落語に興味があるという。そんな彼女の感激した授業は、早川久美子先生の「日本文学講読近世B」だ。日本文学講読は扱う文学作品の年代ごとに講義が分かれており、蒔野さんは近世の講義を受講していた。現代では古い物語や文化に触れる機会がますますなくなってきている。そんななかで蒔野さんは講義のどこに心を動かされたのだろうか。

その講義で取り扱っていた作品は、「心中天網島」という近松門左衛門の作品であった。講義内では、その作品そのものの解説や朗読だけではなく、より理解を深めるために歌舞伎や文楽の映像や映画も付随して見ることもあり興味深かったそうだ。蒔野さんがこの授業を受けようと思った理由は、「趣味が落語なのでせっかくだから江戸時代の文学などを学びたいとおもったから」だという。また「落語と日本文学は通じる部分が多い」とも蒔野さんは言う。例えば表現の部分だ。言葉も持つニュアンスなどが語り方によって大きく変わってくるところに興味深く、驚かされたそうだ。この授業を通して蒔野さんが学んだことは3つあり、1つ目はそうした表現の部分であり、2つ目は日本文学に触れる経験ができたことだった。最近はこの文学に触れる機会がそもそも少ないので経験自体が貴重なものだ。そのうえ、先生の解説付きだからより興味が沸いたのだという。印象に残った先生の解説は、心中の概念の解説であった。心中とは現世から離れるために肉体を捨てることで、それはとても難しい。実際に劇中でも急所を外して心中に失敗し苦しむ場面があるが、そこで心の交流をする際に「肉体がいかにか邪魔か」という考えに至る。この

考え方は新鮮で興味深いと感じたそうだ。そして3つ目は、心中ものという現代ではあまりないシチュエーションの中で、登場人物を通してではあるがその時代の価値観や背景を知り、「共感」を得ることができたことだった。落語では心中は笑いに変化してしまうが、実際の文学ではもっとシリアスであり、現代の倫理観とは異なる一種の「かっこよさ」を感じることもできたそうだ。そしてこの授業で蒔野さんが最も印象に残ったことは、最後の授業で見た「心中天網島」の映画だった。特にその表現技法の工夫に感動したという。ひとつは、その映画では、ふつうは見えないところで劇を支える黒子が、演者の後ろでそれを見ている場面があったり、主人公の羽織を脱がせたりしていた点だった。そのような黒子の使い方は、黒子が世界を動かしているようで非常に興味深かった。またもうひとつは、主人公の妻とその不倫相手を同じ人物が演じている点だった。こうすることで、同じ男を愛しているのに男に愛された方と愛されなかった方の差、違いがよりはっきりしたように感じられた。

最後に蒔野さんから、読者の皆さんに向けてメッセージをいただいた。「皆さん、たまにはこういう文学に触れてみるのも良いと思います。心が動かされるのではないのでしょうか。私もこの授業がなかったらこういう江戸時代の文化に触れることがなかったかもしれません。気が向いたらぜひ試してみてください。」現代は新しい情報、最先端のものに価値があり誰もがそれを求めているような忙しい時代である。しかしだからこそ、たまには少し立ち止まって、蒔野さんのように昔の文学や文化に触れてみるのも良いかもしれない。(文責 大村希望)

インタビュー

2019年5月にサイエンスライティングという授業の一環でインタビューを行うこととなった。授業の先生からインタビューする担当の指示をもらい、筆者はサイエンスライティングの授業でティーチングアシスタントをしている鍵谷さんという方に興味深い授業についてインタビューすることとなった。

鍵谷さんは同志社大学神学部に入學した。神学部というのは各学年60名のみしかいない。ちなみに筆者の所属している経済学部は各学年900名から1000名程度いるのである。神学部というものは日本に6か所のみ設置されておらず、とてもマイナーな学部である。なので、なぜこの6か所しかないマイナーな神学部に進学したのかを尋ねた。そうすると鍵谷さんのご実家が神社を営んでおり、幼少期から神や宗教といった世界に触れていたとのことである。この体験が神学部へと進む道を決めたと鍵谷さんは考えている。鍵谷さんは神学部を4年で卒業した後、同志社大学神学研究科へと進学をした。そして2年前に同志社大学神学研究科で修士をとり、現在は同志社大学神学研究科の博士2回生で研究を行っている。

鍵谷さんの紹介で分かるように今年で同志社生として9年目になるとのことであったが、今回のインタビューで教えてくださった興味深い授業は学士の私たち大学1回生から4回

生の時期にとれる授業であった。しかも、同じような内容で2種類の授業があり、どちらかを4回とれる。つまり合計8単位とれるのだ。この授業は聖書を読んで作品を作ることで聖書を読む機会となるのが良かったと鍵谷さんは考えている。

その授業とは、石川立先生が行っている「聖書学演習1 1 (旧約聖書解釈と作品 (1))」「聖書学演習1 2 (新約聖書解釈と作品 (1))」「聖書学演習2 5 (旧約聖書解釈と作品 (2))」「聖書学演習2 6 (新約聖書解釈と作品 (2))」「聖書解釈演習1 (旧約聖書解釈と作品 (1))」「聖書解釈演習2 (新約聖書解釈と作品 (1))」「聖書解釈演習3 (旧約聖書解釈と作品 (2))」「聖書解釈演習4 (新約聖書解釈と作品 (2))」の8つであった。

聖書学演習1 1・聖書学演習2 5・聖書解釈演習1・聖書解釈演習3ではヘブライ語聖書(旧約聖書)、聖書学演習1 2・聖書学演習2 6・聖書解釈演習2・聖書解釈演習4では福音書を題材としており、決められたところを釈義するところから始めて数名のグループでの解釈を試みるものである。

この授業は神学部の石川立先生が専門としている聖書解釈学を学ぶもので、聖書学ではなく聖書解釈学という分野に楽しく触れることができるとのことであった。聖書学とは歴史から証拠を見つけ出して読むものである。一方、聖書解釈学は歴史に関係なく読み取り方を見つけ出すものである。この面で聖書解釈学というのは受け手や読み手まで視野を広げているのである。

この「解釈」という面を深く含んでいたこの授業はとても自由であった。どのくらい自由かというと、授業の中で聖書を読む中で自分の考えをアウトプットするのだが、そのアウトプットの方法が料理をしたり・絵を描いたり・工作したりといったものであるのだ。シラバスにも「各自が各自なりの解釈をし、そのことを通してそれぞれの『作品』(劇, ラジオ劇, 絵本, 紙芝居, ミュージカル, 小説, マンガなど)を作り上げていってもらいます。」と記載されていた。実際に鍵谷さんはグループで紙芝居を作成して発表されたとのことである。

今回のインタビューで知ることができた授業は神学部生が履修することのできる授業であるため経済学部生の筆者は受けることができない。しかし、実習形式で行え、最大2年間かけて聖書を作品として解釈できるこの授業はとても興味深い授業である。学年によってとれる授業は異なるが聖書学演習または聖書解釈演習で4つの授業すべてで平均GPAが高く、なおかつ他の授業とは異なった実習形式で何回も履修することができるということは印象に残る授業となるだろう。(文責 伊藤風暉)